



多くの分野において
年々増加傾向

工学、理学分野の
女性割合は以前として低い

人文科学	45%
医歯薬学	30%
農学	30%
社会科学	30%
理学	20%
工学	15%

女性研究者の現状と直面する課題

国の第5次男女共同参画基本計画では、大学の理系研究者の女性割合を向上させることを目標としています。大学の理系研究者の女性割合は、多くの分野で上昇傾向にあります。

しかし、大学の理系研究者における女性割合は依然として低く、工学・理学分野では2割以下に留まっています(上図)。固定観念が女性の進路選択に影響していると言われており、本人が研究者になりたいと考えていても、親や親戚から「研究は男の世界」などと言われて、諦める女性も少なくありません。

さらに、研究者の多くを男性が占める現状において、無意識の偏見によって女性研究者が実力を発揮することが難しい現状がある。

ります。例えば、執筆者が女性の名前だと、論文の査読が遅くなったり、厳しく審査されたりする、あるいは研究会で女性研究者が手を挙げても当てられなかったり、後回しにされたりするなど、女性であることによる不利益が生じるケースがあるようです。

研究現場への女性参画で社会はどのように変わるのか

研究現場で多様性が保たれることは、多角的な方面から創造性と深い洞察を与え、新たな発見を広げることができると言われています。実際、多様性が研究の発展につながることは、データでも実証されており、男女両方の発明者があるチームの方が、男性だけのチームよりも特許件

数や特許の経済価値が高いという調査結果があります。性別に関係なく多様な視点を持つことで、より深い洞察や新たな発見が生まれることが関係していると考えられます。

現在、女性研究者が能力を発揮できる環境づくりに向けて、学生や教員の募集に「女性枠」を設ける動きが、全国の理系大学を中心に広がっています。また、国では、女子中高生・女子学生の理工系分野への進路選択を応援する「理工チャレンジ リコチャレ(アペー ジ参照)」という取り組みを行っています。女性の理系進出が進むなど、性差ができてしまっている領域が減っていく、一人ひとりの個性や興味を尊重する選択が当たり前になっていくことが、誰もが輝ける未来社会をつくり出すための鍵となります。

アンコンシャス・バイアスを
払拭して女子生徒の
理工系進路選択を
応援しよう
(内閣府男女共同参画局
公式YouTube)



こちらを
チェック



女子生徒の理工系進路選択を阻害する可能性のある、無意識の思い込みに気づくための動画です。学校や家庭などの事例に基づきながら紹介しています。

▶ プラスアルファ
見て学ぶ

